

2022年度の全学英語教育に関する報告

大門 正幸^{*1}・今村 洋美^{*1}・西村 智^{*1}・加藤 由崇^{*2}・関山 健治^{*2}・和田 珠実^{*2}

要 旨

全学英語教育科（現人間力創成教育院・語学教育プログラム・英語）では、2010年度に教育理念・方針を策定して以来、それに沿って教育を行い、コロナ禍で遠隔授業となった2020年度を除き、その成果と課題について本誌で報告してきた。本稿では、授業内で実施した到達度確認テストと語彙テスト、実力テストの結果、および入学時に実施されるフレッシュマンテストの結果を中心に、2022年度の状況について報告する。なお、これまでも触れることのあった大学全体として取り組むべき2つの課題、すなわち学力差および出席率の問題についても、改めて焦点を当てて報告する。

キーワード

英語教育、到達度確認テスト、フレッシュマンテスト、実力テスト、語彙テスト

1 はじめに

2011年度の全学共通教育のカリキュラム改訂以来、全学英語教育科（現人間力創成教育院・語学教育プログラム・英語）では全学共通教育科目のスキル教育科目として「英語スキルI/II」を実施し、その成果や課題について検討すると同時に、その成果を本誌や学会等で発表してきた（今村・大門, 2020、大門他, 2010; 2011; 2012; 2014; 2015; 2016; 2017; 2018、和田他, 2013a; 2013b、Imamura et al., 2019、Wada et al., 2014）。2017年度には到達度確認テスト（全クラス共通テスト）の改訂を行い、翌2018年度からは改訂版を用いて授業を行っており、同年および2019年度の結果については大門他（2019; 2020）で報告し、2017年度までに見られた問題点が概ね改善されたことを報告した。

遠隔授業のため到達度確認テスト等が実施できなかった2020年度については、遠隔授業に関する報告となったが（大門他, 2021）、対面授業が基本となった2021年度には従来と同様の報告を行い、2018年度、2019年度と同様の成果が見られたことを報告した（大門他, 2022）。

本報告では、2022年度と同様の報告に加え、授業担当者の次元では対処の難しい課題についても触れることにする。具体的には、学力差の問題と、それと関係するであろう成績不良、中でも出席不良の問題である。

2 授業の概略と実施したテスト

「英語スキルI/II」の受講生は、入学時に行われる

フレッシュマンテストの成績によって、多い時間帯で7段階、少ない時間帯で2段階の習熟度別クラスに分けられる。14の時間帯のうち、7つの時間帯においては最上位のクラスを「上級」とし、その他のクラスを「中級」としている。教科書および教材は全学英語教育科（現語学教育プログラム・英語）の教育方針に沿ったものである。2011年度と2012年度には既存の教科書を、2013年度からは独自に作成した教科書を使用している。

当初から、学習の到達度を測るために、各学期の最後に、(i) 読解方略（リーディング・ストラテジー）に関する問題、(ii) 文法に関する問題、(iii) 語彙に関する問題、の設問からなる到達度確認テストを実施してきたが、2017年度に改訂を行い、(iii) を秋学期に独立して行う語彙テストとして実施し、各学期の最後に行う到達度確認テストは (i) 読解方略に関する問題と (ii) 文法に関する問題に限定した。また、その内容についても、より応用力を測る問題に改訂した（大門他, 2019; 2020）。

さらに、秋学期には授業内容とは独立した実力テストを実施し、フレッシュマンテストの成績と比較することで、英語力の変化の確認を行っている。

以下、3節、4節、5節では、それぞれ、到達度確認テストの結果、語彙テストの結果、フレッシュマンテストと実力テストの結果について報告する。6節では、到達度確認テストおよび語彙テストがフレッシュマンテストおよび実力テストとどれくらい相関しているか

*1 人間力創成教育院 語学教育プログラム（英語）教授

*2 人間力創成教育院 語学教育プログラム（英語）准教授

を検討し、これらのテストがどれだけ受講生の実力を反映しているかという点について確認する。7節では大学全体に関わる課題について述べる。

3 到達度確認テストの結果

到達度確認テストの結果を表1と表2に示す。表1は春学期の、表2は秋学期の結果である。表の一行目における「方略」「文法」は、「読解方略問題」および「文法問題」を示す。その前の「春」「秋」は、「春学期」および「秋学期」を、またその後の「上」「中」は、「上級」と「中級」を表す。春学期の有効数は「上級」が206、「中級」が2,199である（注：「春方略」には欠損値が一つあり、有効数は2,198となっている）。秋学期の有効数は「上級」が199、「中級」が1,940である。テストは20点満点であるが、100点満点に換算してある。なお、分析に用いたのは、SPSS Statistics 29 (Mac OS X版) である。

表1 春学期の到達度確認テストの結果

	春方略上	春方略中	春文法上	春文法中
平均	86.0	74.9	84.5	65.5
中央値	85	75	85	70
最頻値	90	80	95	70
標準偏差	8.3	14.1	10.2	18.5
最小値	60	0	45	0
最大値	100	100	100	100

表2 秋学期の到達度確認テストの結果

	秋方略上	秋方略中	秋文法上	秋文法中
平均	75.4	61.3	84.3	63.9
中央値	75	65	85	65
最頻値	80	65	85	80
標準偏差	9.6	16.3	12.8	21.4
最小値	40	0	30	0
最大値	100	100	100	100

平均や中央値、最頻値を見ると、「上級」と「中級」では大きな違いがあることがわかる。また、秋学期の得点が春学期よりも全体的に低めなのは、秋学期の問題には春学期の既習内容も含まれるため難易度が上がるからだと考えられる。また、標準偏差の値が秋学期の方が大きい傾向にあるのも同じ理由によるものであろう。

4 語彙テストの結果

2018年度より実施をはじめた語彙テストの結果を表3に示す。有効数は「上級」が197、「中級」が2,064である。テストは30点満点であるが100点満点に換算

してある。

表3 語彙テストの結果

	語彙上級	語彙中級
平均	91.3	76.7
中央値	93	83
最頻値	97	97
標準偏差	8.3	20.0
最小値	63	0
最大値	100	100

平均、中央値では「上級」と「中級」の間に大きな差がある。最頻値はいずれも97点であるが、標準偏差および最小値に大きな開きがあるのは、「中級」では成績の振るわない受講生の数も多いためである。

5 フレッシュマンテスト・実力テストの結果

新入生は入学時に全員フレッシュマンテストを受けるが、一年次の秋学期、11月末から12月初旬に、二年次のクラス分けの参考資料として、また、入学時からの英語力の変化を測るために、実力テストを受けることになっている。このテストは、フレッシュマンテストと比較可能な内容であるため、両テストの得点は、受講生の実力の伸長を知る参考資料としても用いている。両テストの数値を表4に示す。なお、実力テストについては50点満点のテストであるが100点満点に換算してある。

表4 フレッシュマンテストと実力テストの結果

	フレッシュマン <i>N</i> = 2,858	実力 <i>N</i> = 2,286
平均	56.0	59.2
中央値	58	60
最頻値	70	64
標準偏差	19.3	16.4
最小値	0	0
最大値	98	96

平均点では若干の伸びが見られるが、統計的に有意かどうかをWilcoxonの符号付き順位和検定を用いて分析した¹⁾。その結果、.05の水準で有意であることが分かり、2021年度と同一の傾向が見られた。この点は喜ぶべきであろう。

6 テスト間の相関

2018年度に刷新された到達度確認テストを使用するようになってからは、フレッシュマンテストや実力テ

ストとの間に強い相関が見られることが示され、受講生の実力を反映していることが確認されていた（大門他, 2019; 2020; 2022）。この点は、表5に示すように、2022年度についても同様であった。なお、表5では、参考までに括弧内に2021年度の数値を示してある。

表5 フレッシュマンテスト／実力テストと到達度確認テストとの相関

	フレッシュマン	実力
春の「方略」	.439** (.593**)	.617** (.631**)
春の「文法」	.536** (.693**)	.713** (.716**)
秋の「方略」	.492** (.480**)	.678** (.520**)
秋の「文法」	.506** (.621**)	.685** (.643**)
語彙	.426** (.542**)	.591** (.581**)

** $p < .01$.

7 大学全体で考えるべき課題

最後に、教科や授業担当教員では対応しがたい、大学全体に関する課題について、2点触れておきたい。一つは学生間の学力の大きなばらつきについて、もう一つは履修登録をしたにも関わらず単位の修得に至らなかった受講生についてである。

7.1 学力差

これまで示してきたデータの最小値および最大値の数値から明らかなように、学生間の成績のばらつきは

極めて大きい。また、学科間による学力の差も大きい。この点を示すために、表6に学科毎のフレッシュマンテストの成績に関するデータを、図1にそのデータに基づく箱ひげ図を示す^{2), 3)}。例えば、平均の最低値（BSの48.0）と最高値（LPの68.0）の間には20点の差がある。中央値についても同様で、最低値（BSの48）と最高値（LPの70）の間には22点もの差がある。

入試制度とも深く関わる問題なのでここでは現状を報告するに留めるが、学力差の問題は、教育上の大きな課題となっている。

表6 学科毎のフレッシュマンテストの成績

	平均	中央値	最頻値	標準偏差	最小値	最大値
BS	48.0	48	50	17.2	0	88
EA	56.9	58	40	20.8	0	96
EC	55.2	58	46	21.2	0	92
EK	59.9	62	62	21.5	0	98
EL	58.4	60	56	18.1	0	94
EM	59.2	60	68	17.2	0	90
EP	59.9	64	60	21.5	0	98
ER	57.7	56	46	18.2	0	96
EU	57.5	62	72	20.4	0	94
FR	60.0	64	68	20.3	0	98
FS	56.9	58	76	16.2	0	88
FT1	51.9	52	50	21.5	0	90
FT2	54.4	57	58	16.2	0	86
HF	61.5	63	68	16.1	0	94
HH	52.0	50	60	19.7	0	88
HI	48.7	47	44	16.9	0	84
HJ	56.0	55	74	20.1	0	92
HW	50.2	50	50	20.5	0	88
LB	60.5	60	60	16.7	28	96
LC	62.9	68	72	17.0	0	86
LE	50.9	54	50	19.7	0	84
LK	59.9	62	50	20.3	0	96
LP	68.0	70	64	19.1	0	94
LS	62.4	64	48	17.8	0	98
NA	51.5	52	68	17.0	0	84
PJ	62.6	64	62	17.5	0	90
PY	55.4	55	56	18.1	0	94

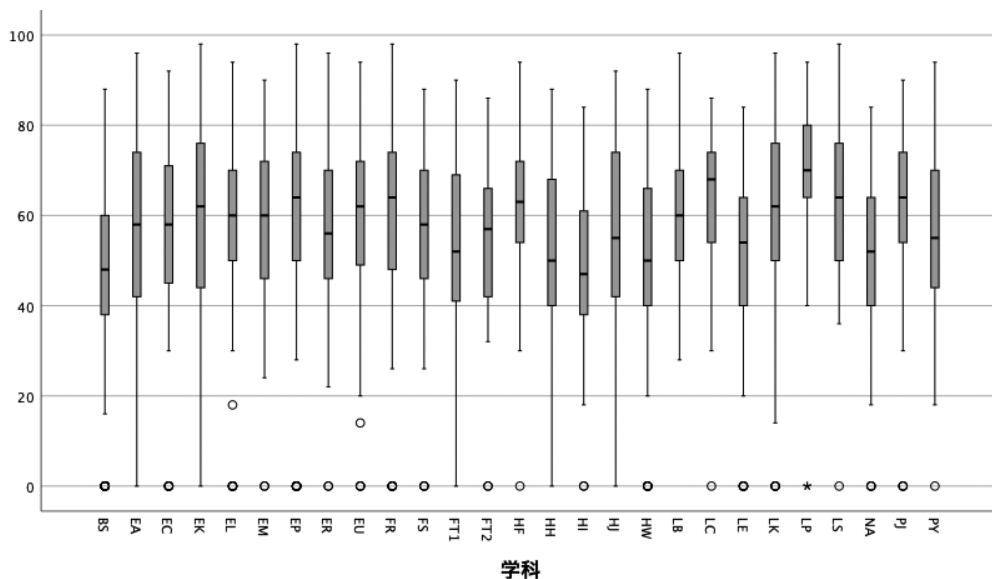


図1 学科毎のフレッシュマンテストの成績

7.2 単位が修得できない理由：出席率の低さ

最後に、履修登録をしたにも関わらず単位の修得に至らなかった受講生について分析しておきたい。

毎授業の学習の積み重ねを重視する「英語スキルI/II」では、欠席は原則として3回を限度としている。つまり15回の授業のうち最低でも12回（80％）の出席が要求される。表7に示すように、成績と出席率にははっきりした関係があり、春学期と秋学期のいずれにおいても単位を修得できなかった学生の出席率は極めて低い。

表7 成績と平均出席率

	S	A	B	C	E
春	96.3% (N=434)	93.8% (N=813)	93.0% (N=639)	90.5% (N=483)	72.1% (N=142)
秋	94.6% (N=270)	93.1% (N=629)	90.8% (N=676)	88.2% (N=671)	66.4% (N=239)

単位未修得者（E評価）について言えば、春学期は57名（40.1％）、秋学期は108名（45.2％）が規定の出席率を満たしておらず、主としてそのために不可になったと考えられる。

この傾向は再履修者ではより顕著であり、表8に示すように、単位を落とした再履修生の出席率の平均は3割程度である。規定の出席率を満たさず主としてそのために不可になったと考えられる受講生の数は、春学期41名（87.2％）、秋学期15名（100.0％）である。

表8 成績と平均出席率（再履修生）

	S	A	B	C	E
春	92.0% (N=5)	89.2% (N=21)	87.3% (N=40)	85.3% (N=66)	30.4% (N=47)
秋	90.0% (N=2)	90.5% (N=19)	89.9% (N=29)	86.7% (N=41)	31.1% (N=15)

授業に魅力を感じず出席率が低くなった可能性は否定できないが、履修登録後1度も出席していない受講生もいる。その数は、通常の履修生では春学期、秋学期それぞれ4名（E評価者中の2.8％）と20名（E評価者中の8.5％）、再履修生では春学期、秋学期それぞれ12名（E評価者中の25.5％）および6名（E評価者の40.0％）である。

単位を修得できない受講生の出席率の低さは過去からずっと続いている問題であるが、やはり、オリエンテーションや指導教授制を利用したきめ細かい対応など、抜本的な対策が必要であろう。

謝辞

教育方針の策定、各種テストの実施、その他の運営面でご協力くださった先生方、本報告の内容に関して貴重なコメントを下くださった先生方、英文要旨に目を通してくださったデイビッド・アレン先生に厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 得点は非正規分布をなしていたため、ノンパラメトリックな検定を行った。方法はSPSSがデータに基づいて自動的に選択したものである。
- 2) 学科の略号は以下の通り。BS（経営総合学科）、EA（建築学科）、EC（都市建設工学科）、EK（応用化学科）、EL（電気電子システム工学科）、EM（機械工学科）、EP（情報工学科）、ER（ロボット理工学科）、EU（宇宙航空理工学科）、FR（応用生物化学科）、FS（環境生物科学科）、FT1（食品栄養科学科・食品栄養科学専攻）、FT2（食品栄養科学科・管理栄養科学専攻）、HF（英語英米文化学科）、HH（歴史地理学科）、HI（コミュニケーション学科）、HJ（日本語日本文化学科）、HW（心理学科）、LB（生命医科学科）、LC（臨床工学科）、LE（スポーツ保健医療学科）、LK（保健看護学科）、LP（理学療法学科）、LS（作業療法学科）、NA（国際学科）、PJ（現代教育学科）、PY（幼児教育学科）。ただし、英語英米文化学科（HF）および国際学科（NA）は全学向けの授業を受講していない。また、ロボット理工学科（ER）は独自の授業を実施している。このため、到達度確認テスト、実力テスト、語彙テストの分析においては、これらの学科は対象となっていない。
- 3) 箱ひげ図の見方は次の通り。箱の部分には、データを並べて四分割した場合の、真ん中の2つ、つまり全体の50％が入る。箱の中の横線は中央値を示す。箱の上下に伸びた部分は、外れ値を除いた最大値と最小値を表す。“○”は軽度の外れ値（箱の長さの1.5倍から3倍まで）を、“☆”は極端な外れ値（箱の長さの3倍以上）を表す。

参考文献

- 今村洋美・大門正幸（2020）「中部大学におけるオンライン全学英語教育の取り組み－教員間連携に焦点をあてて－」大学英語教育学会第35回中部支部大会（オンライン開催）での口頭発表。
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明（2010）「大学英語教育に関する基本方針について－専門教育機関としての大学における英語教育の在り方を巡って－」『中部大学教育研究』10, 23-28.

大門正幸・柳朋宏・西村智・野田恵剛・山田伸明
 (2011)「全学英語教育に関する中間報告」『中部大学教育研究』11, 87-94.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・柳朋宏 (2012)「平成23年度秋学期の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』12, 81-89.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実 (2014)「平成25年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』14, 29-37.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実 (2015)「平成26年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』15, 65-74.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2016)「平成27年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』16, 89-97.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2017)「平成28年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』17, 35-44.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2018)「2011年度－2017年度の全学英語教育に関するまとめ」『中部大学教育研究』18, 1-6.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2019)「2018年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』19, 1-7.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2020)「2019年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』20, 31-36.

大門正幸・今村洋美・西村智・和田珠実・加藤由崇・中島眞吾 (2021)「2020年度の全学英語教育に関する報告－オンライン授業への取り組み－」『中部大学教育研究』21, 13-20.

大門正幸・今村洋美・西村智・加藤由崇・関山健治・和田珠実 (2022)「2021年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』22, 27-31.

和田珠実・大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2013a)「平成24年度の全学英語教育報告」『中部大学教育研究』13, 79-85.

和田珠実・今村洋美・大門正幸 (2013b)「中部大学におけるEGAPを意識した全学英語教育カリキュラム改革」大学英語教育学会第52回国際大会（於京都大学）での口頭発表.

Imamura, Hiromi; Wada, Tamami; Ohkado, Masayuki (2019) “Utilizing a Tailor-made Textbook Focusing on EGAP at a Japanese University,” poster presentation at JACET Seminar 2019, Tamagawa University, Japan.

Wada, Tamami; Imamura, Hiromi; Ohkado, Masayuki; and Laurence, David (2014) “An

English Education Curriculum Reform Focusing on EGAP at a Japanese University,” oral paper at AILA World Congress 2014, Brisbane, Australia.

A Report on English Education in 2022

OHKADO Masayuki^{*1}, IMAMURA Hiromi^{*1}, NISHIMURA Satoshi^{*1},
KATO Yoshitaka^{*2}, SEKIYAMA Kenji^{*2} and WADA Tamami^{*2}

*1 Professor, Language Education Program (English), School of General Education, Chubu University

*2 Associate Professor, Language Education Program (English), School of General Education, Chubu University

Abstract

Since 2011, the division of English Education (Language Education Program, English, School of General Education) has been providing education based on newly established policy as in reported in Ohkado et al. (2010). We have also been reporting the results of the new curriculum as measured by the combination of two existing tests and two newly created tests: the freshman test and the proficiency test; and the achievement test and the vocabulary test, with the exception of the year 2020 because relevant classes were all held online due to the spread of COVID-19 and the tests were not conducted in the regular fashion. In this paper, we report the results of English education based on our policy in 2022. We also touch on the two recurring and growing issues of (1) academic gap and (2) low attendance rates.

Key words

English Education, Achievement Test, Freshman Test, Proficiency Test, Vocabulary Test